

修 士 論 文 の 和 文 要 旨

研究科・専攻	大学院 情報理工 学研究科 総合情報学 専攻 博士前期課程		
氏 名	作道 大哉	学籍番号	1030063
論 文 題 目	触感研究における新たな指標としてのオノマトペの有効性に関する研究		
<p>要 旨</p> <p>触覚研究の中でも、「触感」は対象物の微細な表面状態を認知する知覚であり、近年注目されている(白土ら, 2004)。人間が触覚を通じて、どのように物体の性質を知覚しているか、その認識の主要因を特定する研究や、その要因を利用し材質認識を行うシステムや、触覚センサの開発などが行われている。これらの研究は素材の触感評価と素材の物理特性の対応付けをとることが可能である一方、触対象を触った時に生じる好・嫌や快・不快といった個人差の大きい感性的な側面を測定するのに最適な手法とは言えなかった。また、触感認識に重要な要因の抽出を行っている従来の研究は、対象とする素材や評価項目によって、触感認識の要因が限定されてしまうという問題が考えられる。</p> <p>そこで本研究では、ヒトの触感に関して人が手触りを表す際に用いることの多いオノマトペに着目し、触感における新たな指標としてオノマトペの有効性を検討する。検討方法として、同じ感性語で触感が表現される素材でも触感の快-不快の違いによって異なるオノマトペで表現されるという仮説を立て、被験者に素材の触り心地をオノマトペまたは感性語で表現してもらい、さらに素材の触り心地の快-不快を7段階で評価してもらうことにより検討した。その結果、様々な触感の素材に対してオノマトペは感性語より素材ごとに異なった表現が見られる傾向にあり、特に素材をなぞったときの表現が多く見られた。さらに、オノマトペの音素と触感の快-不快との関係性には一様の傾向が見られたことから、感性的質感認知と物理特性の知覚が融合したヒトの触感認識を表す表現として、オノマトペは適した表現であり、触感認識の評価において従来の感性語を指標とするより、オノマトペを指標とした方が、有効性があると言える。</p> <p>さらに、オノマトペを新たな指標として、オノマトペに基づき網羅性のある素材群を収集し、従来研究で行われてきた触感認識に重要な要因について再考を行った。その結果、6つの因子が抽出され、従来研究と共通する因子に加え、新たな因子を抽出することが出来た。本研究により、オノマトペに基づいた網羅性のある素材群と触感において網羅性のある評価尺度を用いることで、触感認識に重要な要因が6つに集約されることが分かった。</p>			